

高齢者と協働するナレッジ活用型地域資源学習プログラムの開発（Ⅱ）

—独居後期高齢者向け回想法サロンの効果と課題—

青柳かつら

Key Words 高齢者 (Senior citizens)、地域資源 (Regional resource)、博物館 (Museum)、回想法 (Reminiscence) アンケート (Questionnaire)

1 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

近年、人口減少や高齢社会対策は全国の自治体に共通する課題となっている。筆者は、北海道において、多くの博物館園（以下、館園）が、高齢者を展示や教育普及事業のターゲットと認識しているものの、これら事業における高齢者への訴求力や企画力が弱いこと、この背景に、館園側の資金や職員、ノウハウの不足、特に高齢者対象の活動プログラムの不足等があることなどを明らかにした（青柳 2016）。

これを踏まえ、筆者は、上記の不足に配慮し、なるべく簡便に館園が実施できる、地域資源の活用と高齢者福祉に資するプログラムの開発に取り組んでいる。地域資源とは、その地域に固有に存在する、生産や生活に利用される有用物の総称（佐藤ほか 2005；青柳 2014）である。地域資源には入手が容易であるという長所がある。そして、地域資源の活用には、地元学（吉本 2008）の発想に基づき、他所からではなく、その地域にあるモノ、人材、情報を使用してこそ、生活づくり、ものづくり、ひいてはその地域を「自治する力」が実体化されるという意義がある。

本研究では、こうした着眼から、市町村で活動する諸組織との協働で、回想法⁽¹⁾を主体とする「ふれあいサロ

ン事業」（後述）を実施し、この効果と課題を明らかにすることを目的とした。

回想法については、野村（1998、2011c）、奥村（2011）、北名古屋（2013）らによって、高齢者の認知機能やQOL（生活の質）の向上、BPSD⁽²⁾の軽減、そして介護予防に関連した様々な効果が報告されてきた。回想法は、全国、そして北海道においても館園から大きな関心が寄せられている（例えば、市橋 2014；北海道博物館協会 2015）。しかしその反面、道内館園での回想法の実施例は5%未満と僅少である（青柳 2016）。この知見を踏まえ、本研究では、上記の目的の一つ、課題解明の中で、「なぜ回想法は広まらないのか」「どうしたら広まるのか」についても考察することとした。

本研究は、北海道の館園の現状と地域特性を踏まえた、高齢者向けプログラムの開発を体現するものであり、館園が、地域活性化や高齢者の社会参画に役割発揮する可能性を検討できる意義がある。

(2) 方法

筆者は、2015～16年度に士別市朝日町あさひ自治会（以下、自治会）からの依頼を受けて、自治会主催ふれあいサロン事業（以下、サロン）（対象：自治会員独居後期高齢者22名）へ、グループ回想法⁽³⁾の企画者及びリーダー（進行役）として参画した。この枠組みで、各

表1 アンケート調査質問項目

参加者	スタッフ
1 サロンの振り返り (1) サロンで昔の記憶を思い出しましたか？ (2) サロンで楽しい時間を過ごせましたか？ (3) 参加者同士で、思い出話でおしゃべりができましたか？ (4) 「年をとるということは、若い時に考えていたよりもよいことだ」と思いますか（主観的幸福観）？ (5) 自分は「去年と同じように元気だ」と思いますか（主観的健康観）？ (6) 「地域の人とのつながりは、自分の支えの一つだ」と思いますか？ (7) 自分の今の生活に満足していますか（主観的幸福観）？ (8) また、こうしたサロンに参加したいですか？ 2 サロンに参加してよかったこと	1 サロンに参画（企画・参加）してよかったこと 2 サロン企画での苦労点

日10:00～13:00に開催されたサロンにて、各回1時間～1時間半の時間数で6回の回想法を提供し、運営の過程を参与観察した。

そして、最終回に参加者（サロン対象者である出席者、以下同じ）とスタッフを対象にサロンの効果をたずねるアンケート調査（表1）を実施した。参加者アンケートのうち一部の項目については、 χ^2 検定と残差分析によって、北海道北部である、上川北部地域居住の高齢者を対象とした既存調査（北海道社会福祉協議会 2009）（以下、上川北部高齢者）の結果との差異を比較し、今回の回答者の特徴を把握した。比較する項目は、「上川北部高齢者」にて主観的幸福観、主観的健康観を問う内容のうち、学芸員が調査しても比較的回答に抵抗が少ないと考えられた3項目を選択した。クロス表において、期待度数が1以下のセルがあった場合、および期待度数5以下のセルが全セルの20%以上あった場合はイエーツの補正を行った。

(3) 調査地概観

士別市朝日町は、旧士別御料林である4.8万ha（森林率92.5%）の森林を有し、その豊富な森林資源から林業を主要産業とする町として発展した。現町域は昭和24（1949）年に上士別村より分村独立して朝日村、そして昭和37（1962）年に朝日町となり、平成17（2005）年に隣接する士別市に合併した。人口は1,347人（2016年12月現在）で、近年、人口減少と高齢化が進行している。同町には、学芸員の配置がない朝日町郷土資料室（以下、資料室）があり、同町の自然、歴史、文化に関する地域学習の拠点となっている（青柳 2010、2014；青柳ほか 2015）。

2 サロンの開始と企画運営

(1) サロンの発足の経緯と事業目的

自治会では、2012年度より士別市社会福祉協議会（以下、社協）より一部補助を得て、自治会会員である独居後期高齢者を対象に福祉パトロールやホテルでの昼食交流会事業を実施してきた。2015～16年度は、これら事業に加え、新たに社協より2カ年の補助を得て、町内の社会教育施設等を会場に、サロンを実施することとした。サロンのメインプログラムは回想法であるが、自治会は、高齢者福祉にかかわる諸組織へ依頼し、高齢者の暮らしをサポートする様々な情報提供も組み込むこととした。

サロンの目的は、助成元である社協の事業目的も加味し、自治会との合意のもと、特に高齢者の「閉じこもり」防止に着眼して、①過去をしみじみと思い出し、気持ちを和ませ、参加者に楽しい時間をすごしてもらう、

②参加者のコミュニケーションを促し、孤独感を癒す、③参加者に、また来たいな、集まりたいなと思ってもらうとした。

(2) 回想法の運営

1) 企画の手順

回想法の企画にあたっては、①朝日町の地域資源を活用すること、②効率性と持続性を重視し、企画者（自治会・筆者）の時間的、金銭的負担を少なくすることに留意した。具体的には、以下の手順で行った。

- a. 自治会がサロンの実施日時と場所を決定する。
- b. 自治会会長（以下、会長）と筆者が電話やメールで企画案について打ち合わせる。
- c. 自治会が、サロン参加者への案内、会場使用や茶菓・弁当等の手配をする。
- d. 筆者が回想法の題材（テーマ）と素材（昭和期の写真、北海道博物館（以下、道博）所蔵の体験学習資料等）を手配し、企画書を作成する。
- e. 開催日前日に、資料室等にて、企画書をもとに会長と筆者とで打ち合わせを実施する（前日企画会議）。この会議では、同室職員からも意見をもらい、回想法の題材と素材とを朝日町住民の経験と合致するものへ絞り込む。
- f. サロンの実施。

2) 回想法の実施から明らかになったこと

サロン開始以前、筆者は回想法の企画及びリーダーの経験は皆無であった。そこで、まず文献（NPOシルバー総合研究所 2007；野村 2011d；鈴木 2013、写真1）によって回想法について勉強し、サロンを開催するなかで、運営のスキルを身に着けることとした。紙幅の都合上、詳細は別稿とするが、2015年12月、回想法の研究・普及施設である、北名古屋市回想法センターを訪問して、先進地の回想法の展開事例を実地に学ぶ調査も行った。

こうして、サロンにて6回の回想法を実施した（表2、写真2～15）。

回想法の題材は、対象者の属性に配慮して設定した。対象者は、自治会によると、全員がほぼ健常な後期高齢者（75歳以上）であり、平均寿命の男女差も影響して、女性が18名（対象者の81.8%）であった。また、自治会の範囲が朝日町市街であることも関係し、旧朝日営林署職員などサラリーマンの妻や商店経営など自営業者であった人が多数であった。このため、題材は、女性が共通して経験を持つ、家事を中心とする衣・食・住、男女共通で経験がある昭和期の遊び、年中行事、人生儀礼などを設定した。筆者は、同町にてこれまで昭和期の農林

表2 ふれあいサロンのプログラム及び実施概要

番号	開催日	場所	プログラム内容	参加人数（人）			
				対象者	講師・スタッフ	見学	計
1	2015.8.18	朝日町郷土資料室	①資料室見学、②回想法「子供の頃の思い出」	12	9	0	21
2	2015.9.18	あさひサンライズホール	①澱粉団子づくり・試食、②回想法「山菜調理」「林業用具の使い方」ほか、③動画鑑賞「朝日町制30周年記念映像」	12	9	1	22
3	2015.11.10	朝日町地域交流施設和が舎	①頭と体の体操、②回想法「冬の食文化とくらし」	19	6	1	26
4	2016.5.31	朝日町郷土資料室	①資料室見学、②回想法「子供の頃の遊び」	17	7	0	24
5	2016.6.27	朝日町地域交流施設和が舎	①交通安全のお話、②昔のゲームを楽しむ、③回想法「昔の結婚式、娯楽」	13	8	0	21
6	2016.10.4	朝日町旧佐藤医院	①回想法「昔の医療、薬、病気の思い出」、②同医院内見学、③アンケート回答	15	6	0	21
総計							135

業史を中心とする聞き取り調査（青柳 2012、2015a、2015b）を実施してきたが、上記の題材に対応するため、道内及び道北地域の民俗（例えば、矢島 1986；宮良ほか 1998）について新たに勉強することになった。

そして題材は、各回の開催の都度に選定した。食文化の再現である「澱粉団子づくり・試食」（表2-2①）、レクリエーション・プログラムである「昔のゲームを楽しむ」（表2-5②）は、それまでの回想法で出た話題をもとに参加者の要望を取り上げる形で設定し、その回のサロンでは、これらプログラムに関連した回想法を行うなどした。

回想法の企画上、特に役立った素材は、昭和30年代を中心に撮影された写真であった。写真には、当時の生活道具だけでなく、被写体である人物の服装、髪型、表情などの風俗、背景である家、まちなみ、農地などの多様な景観が記録されている。1枚の写真であっても、視覚的な情報量が多いため、回想法参加者が様々な記憶を蘇らせることができた。

これらは、「写真回想法」素材として大判写真集、DVDのかたちで販売されており、手軽に入手可能であった（例えば、須藤 2006a、2006b、2006c；鈴木 2013、2014a、2014b、写真16：大判写真集を付録とする鈴木 2013は写真1に同じ）。これらを素材の原案として、前日企画会議にて、写真にまつわる情報の収集、使用する写真の絞り込みをしたり、資料室や朝日町住民が所蔵する類似の写真を探すなどした。

そのほか、同町の地域資源である資料室所蔵の実物資料、さらには、筆者、資料室、そのボランティア組織である「知恵の蔵運営委員会（以下、知恵の蔵）」との協働製作による、同町の森林利用技術を再現・記録した短編映像（青柳 2015a）も素材として活用することができた（表2-2②）。

3 サロンの変化と効果

(1) サロンの変化

1) 回想法でのコミュニケーションの変化

2015年度初回の回想法は、リーダー（筆者）の投げかけや質問に対して、一部の人がなんとなく答え、その後は近くに座った同士3～4人が好きな話題で、いわば好き勝手に話すものであった。前日企画会議で3枚に厳選した写真も、写真集のままで回覧したため、選んだ以外の写真を参加者が手に取って見てしまい、素材を絞り込む⁽⁴⁾こともできなかった。

こうした失敗の理由としては、経験不足ゆえのリーダーのグループワーカー⁽⁵⁾としての力量不足、参加者相互の面識の浅さ、人前で話すことの参加者の恥ずかしさ、グループ回想法の一般的な定員7・8～10人（NPOシルバー総合研究所 2007）を超えており（表2）、集団が大きすぎてリーダーや参加者相互の声が聞こえない、リーダーを支援するコ・リーダーの不在等が考えられた。

和を重視し、集団を少人数の班（サブ・グループ）に分けることは避けたい自治会の意向もあり、リーダー1人で、いかに集団の凝集性を高めるかが課題であった。

そこで2回目以降の回想法では、筆者はリーダーとして以下の工夫をした。

- なるべく大きな声ではっきりと話す。
- 質問への意思表示として挙手をしてもらい、発言に躊躇がある人、話を聞くのが好きな人へ配慮する。
- 傾聴の態度を伴う返答によって会話に介入する。
例：「そうですか、なるほど。～」「～ということなのですね」
- オープン・クエスチョンの使用。
例：「どんなことがありましたか？」「それはどんな感じののですか？」（「はい」「いいえ」で答えられるクローズド・クエスチョンを減らし、対話を展開させる）

- e. 話題を拾い上げて全体へ投げかける。
 例：「〇〇さんは、こう言っておられますが、ほかのかたはいかがですか？」
- f. 素材提示用に液晶プロジェクターとスクリーン、または大型液晶テレビを使用する。提示のタイミングを統括するとともに、大きく見やすい素材提示によって、参加者の注意を惹きつける。

上記の工夫、そして参加者が相互に顔なじみになってきたことにより、リーダーの投げかけや質問に対して、

参加者から自発的な返事が得られるようになった。参加者の反応は徐々に良くなっていき、笑顔がみられたり、集中力が向上して同じ話題で話し続けることもできるようになった。

2015度3回目サロン終了時に、筆者が一部の参加者に感想を聞いたところ、「楽しかった」「持ち寄り（手弁当、昼食支給なし）でもいいからまたやりたい」「（食文化再現用に）また煮豆をつくってあげるよ」といったサロンの楽しさやリピート参加への高い意欲を挙げる声も聞くことができた。

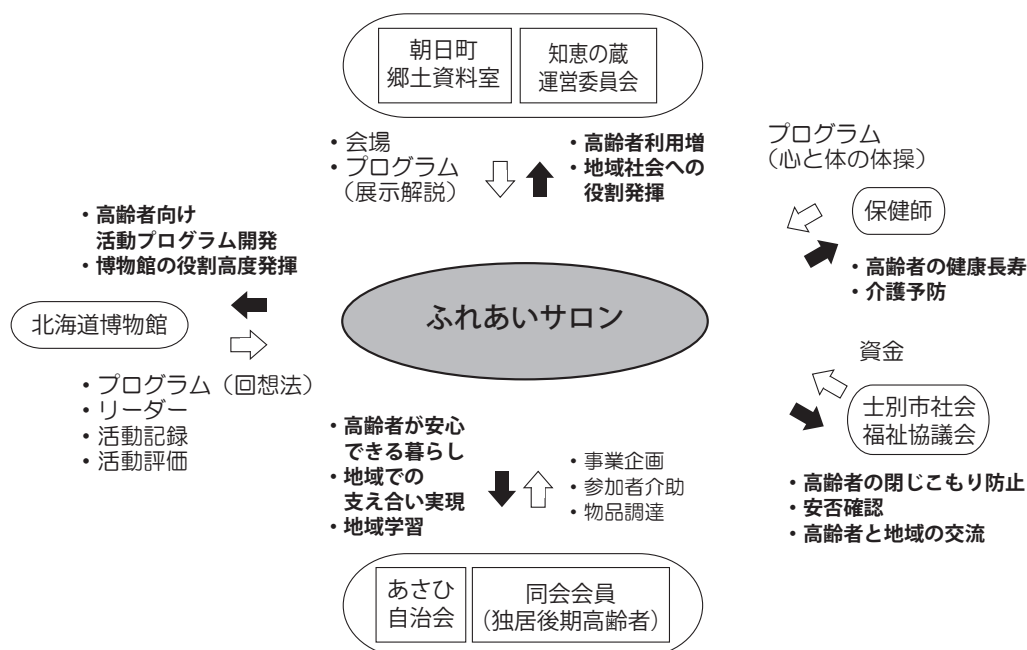


図1 2015年度におけるふれあいサロンの参画者

注) 丸ゴシックは活動に投入しているもの、太ゴシックは活動から獲得しているものを示す。

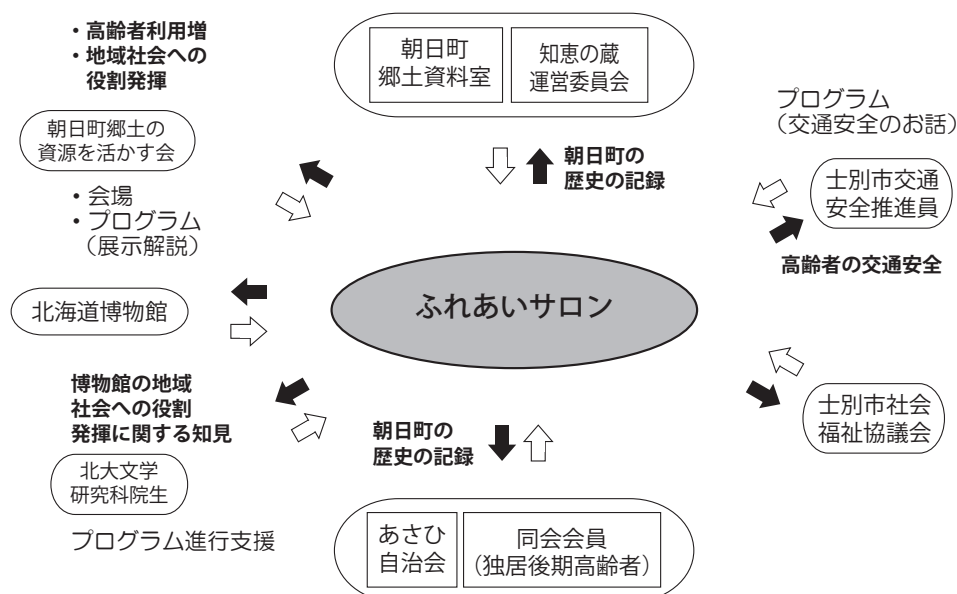


図2 2016年度におけるふれあいサロンの参画者

注) 丸ゴシックは活動に投入しているもの、太ゴシックは活動から獲得しているものを示す。2015年度と内容が同じものについては記載を省略した。

2) グループ回想法から個人回想法へ

2016年度は、5～6回目のサロン終了後に、各回1名計2名に、個人回想法として生活史の聞き取り調査を行った。これは、参加者のグループ回想法への積極性や生活経験を考慮して、筆者から自治会へ実施を依頼したものであった。

聞き取り調査の時間は被調査者の負担を考慮し、1時間程度とした。調査結果は、了解を得て録音して書き起こし、記録集を被調査者本人へフィードバックした。被調査者からは、「対話が楽しくて時間を忘れた」「記録してもらえて良かった」といった肯定的な評価が得られた。

こうした個人回想法の記録集は、サロンの記録集と共に自治会、資料室へ報告した。記録化にあたっては、個人の秘密を侵害したり、「回想法で人の噂話をしている」ととられやすい部分は記載しないなどの配慮を行った。

これら記録集は、「今、高齢者の記憶を記録しないと歴史・文化が失われる」という問題意識から、同町の歴史の記録化を重視する、自治会、資料室からも高い評価を得ることができた。

3) サロン参画者の拡がり

サロンを開始した2015年度、サロンに参画する主体とその働き、すなわち、サロンに投入しているものとサロンから獲得しているものは、以下であった。

まず、自治会は、事業を企画し、参加者の介助、事業に必要な物品の調達等を行い、高齢者が安心できる暮らし、地域での支え合いの実現、スタッフの地域学習の機会獲得という効果を得ていた（詳細次節）。また、社協は、サロンの資金を助成し、高齢者の閉じこもり防止、参加者の安否確認、高齢者と地域の交流といった助成目的を達成していた（詳細次節）。

さらにサロンへのプログラム提供者陣として、まず道博は、企画者及びリーダーとして「回想法」を提供し（写真3、7、9・10、13・14）、活動の記録と評価アンケートを行った。一方で、館園で使用できる、高齢者向け活動プログラムの開発、高齢社会における博物館の役割発揮という使命の達成に効果を得ていた。次に、資料室と知恵の蔵は、会場とプログラム「展示解説」を提供し（写真2、8）、一方で資料室の高齢者の利用増、地域社会への役割発揮といった効果を得ていた。そして、保健師は、講師としてプログラム「心と体の体操」を提供し（写真6）、高齢者の健康長寿、介護予防への役割発揮といった効果を得ていた（図1）。

2016年度は、道博によるサロンの記録の蓄積、個人回想法の実施とその記録により、自治会、資料室は朝日町の歴史の記録化という効果を得るようになった。

そして、サロンに新たに、士別市交通安全推進員、

「朝日町郷土の資源を活かす会（以下、活かす会）」、北海道大学大学院文学研究科院生（以下、院生）が参画した。すなわち、まず士別市交通安全推進員は講師としてプログラム「交通安全のお話」を提供し（写真11）、高齢者の交通安全への役割発揮といった効果を得ていた。次に、活かす会は、歴史的建造物「旧佐藤医院」を会場に、同医院の解説プログラムを提供し（写真15）、一方で同医院の高齢者の利用増、地域社会での活用という効果を得ていた。最後に、院生は、2015年度はサロンの見学者であったが、2016年度は昔のゲーム体験など、プログラムの進行を支援し（写真12）、本件を事例に、博物館の地域社会への役割発揮に関する知見を得ていた（図2）。こうした参画者の拡大により、サロンの運営スタッフとプログラム、そして各プログラムの中での話題や題材とが多様化した。2016年度は、20代の道博学芸員（専門：民俗学）、院生（専門：博物館学）がサロンに参画したことにより、高齢者と若者の世代間交流も実現することもできた。これらは後述する参加者のサロンへの肯定的評価の高さに繋がったと考えられる。

(2) アンケートによる効果把握

事業の評価や効果測定を行うに、本来、事業の実施前と実施後と比較してその変化を論じるべきである。しかし、サロン開始時点は主催者の意向もあり、参加者の回答の負担の大きさからアンケートの実施は困難であった。以下の理由や工夫により、サロン最終回にアンケートを実施することができた。

- a. 2カ年を経て、スタッフと参加者間に信頼関係ができ、サロンに親和的な雰囲気がつくられた。
- b. アンケート用紙は、文字を大きくして読みやすくしたほか、○をつければ回答可能なシンプルなものにした。
- c. アンケート回答をサロンのプログラムの1つにして、30分程度の十分な時間を確保した。
- d. 回答方法に不明点があれば、調査者がすぐに察知でき、被調査者も質問がしやすいように、参加者全員でアンケートの質問を1問ずつ回答する形式にした。

1) 参加者からの評価

a. 単純集計

参加者アンケートの結果、15の回答が得られた（回収率100.0%）。

まず、サロンの振り返り（全8問）では、「8 またサロンに参加したい」の肯定的評価が最多で100.0%、一方「5 去年と同じように元気だ」が最少で53.3%であった。

事業の効果は、事業目的の達成度合いによって論じら

れるべきである。こうした観点から、既述の3点のサロンの事業目的に関連した評価項目を見ると、「1 サロンで昔の記憶を思い出した」「2 サロンで楽しい時間を過ごせた」（目的①の関連項目）、「3 参加者同士で、思い出話でおしゃべりができた」（目的②の関連項目）（以上、各93.3%）、「8 またサロンに参加したい（100.0%）」（目的③の関連項目）の4項目の肯定的評価は90%以上と非常に多数であり、事業目的の達成を確認できた。高齢者の社会的サポートという大局的な観点でのサロンの目的、そして見守り、安否確認という福祉パトロールの事業目的にも関連した「6 地域の人とのつながりは、自分の支えの一つだと思う」も93.3%と多数であった（図3）。

次に、サロンに参加してよかったこと（複数回答可）について、最多は「楽しい思い出が増えた」「おいしいものを食べた（各100.0%）」であった。回想法の目的（市橋 2014）に関連した項目「昔のことを思い出して心が元気になった」、福祉パトロールの事業目的に関連した「自治会内であいさつが増えた」も各86.7%と多数であり、当サロンでの回想法の効果、そして福祉パト

表3 サロンに参加してよかったこと（N=15）〔複数回答可〕

	回答数	比率（%）
楽しい思い出増えた	15	100.0
おいしいものを食べた	15	100.0
話したことのない人と話せた	13	86.7
自治会内あいさつが増えた	13	86.7
思い出で心が元気	13	86.7
顔なじみが増えた	11	73.3
新しいことを学んだ	9	60.0
その他	9	60.0

注）回答総数は98、1回答者当たり選択肢を6.5個回答

ロールへの波及効果についても確認できた。なお、「その他」が60.0%と比較的多数（表3）であったが、これらは、アンケートの自由記載欄への回答に該当するもので、企画への感謝、楽しみが増えたことを述べる感想、男性の多数の参加をのぞむ意見等であった。

本研究では、回答負担を配慮してアンケートに自由記載欄を設けなかった。しかし、こうした多数の「その他」の記載が得られたことは、既述の理由や調査者の工夫もあり、アンケート回答が大きな負担ではなかったことを示していると思われる。

b. クロス集計：上川北部高齢者データとの比較

まず主観的幸福観について、「4 年をとるということは、若い時に考えていたよりもよいことだ」については、サロン参加者は、「よい」が最多60.0%を占めた。一方、上川北部高齢者は、「悪い」最多48.6%を占めた。

両者の回答区分の分布には有意差が見られ、サロン参加者は、上川北部高齢者よりも「よい」の比率が高く、「悪い」の比率が低かった（表4）。サロン参加者は、道北高齢者と比べ、自己の人生や老年期に対して肯定的で、自己評価が高い人が多いことがわかった。さらに、「7 自分の今の生活に満足している」については、サロン参加者（80.0%）、上川北部高齢者（86.5%）ともに「はい」が最多であった（表5）。

次に、主観的健康観について、「5 去年と同じように元気だ」については、サロン参加者（53.3%）、上川北部高齢者（64.9%）ともに「はい」が最多であった（表6）。

なお、上川北部高齢者データは65歳以上を調査対象としており、設問ごとの年齢別クロス集計は実施されていない。他方、サロン参加者はすべて75歳以上であった。一般的に、年齢が増加するほど、身体能力の衰えや老年

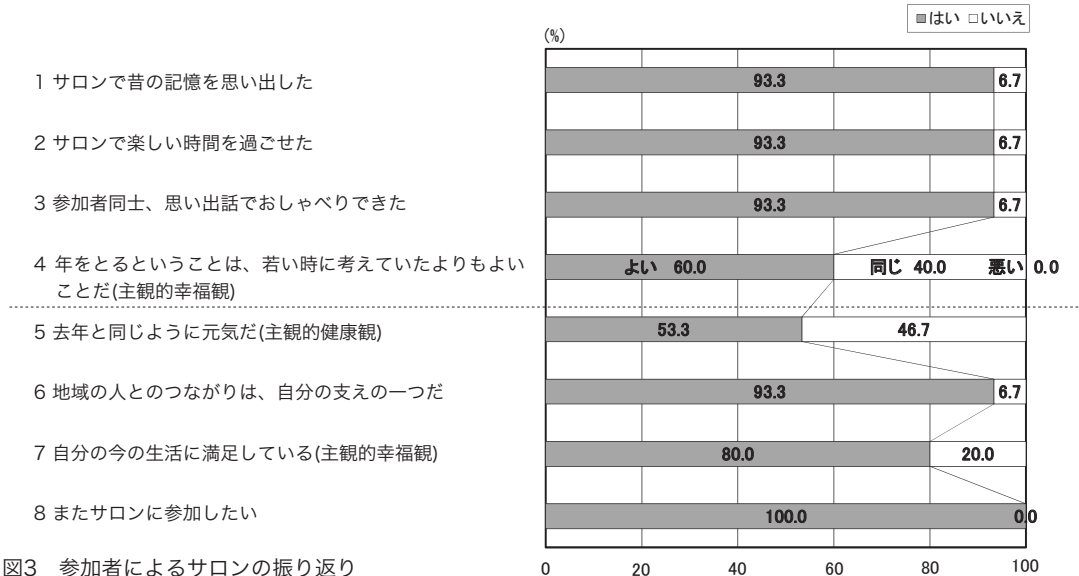


図3 参加者によるサロンの振り返り

性うつなどの症状が現われやすい。これを加味すると、両調査で有意差がない結果（表5・6）は、サロン参加者の主観的幸福観および主観的健康観が相対的に高いことを示唆している。

これらサロン参加者に見られたポジティブな結果は、既述のような事業実施前後の比較ができないため、サロンの効果であるかは検証できない。日頃から主観的幸福観、主観的健康観の高い人々が参加した可能性はあるものの、少なくともサロンの場が、彼らのポジティブな意識を大きく損なう場ではなかったということは指摘できる。

2) スタッフからの評価

a. 単純集計

スタッフアンケートの結果、5の回答が得られた（回収率100.0%）。回答者の内訳は、自治会役員3、知恵の蔵及び活かす会が各1であった。

まず、サロンを企画・参加してよかったこと（複数回答可）について、最多は「参加者のコミュニケーションが徐々に活発になった」「参加者が心の元気を得ていたようだ」「昔の暮らしについて経験者の話を聞くことができた」（各100.0%）であった。「昔の暮らしについて

経験者の話を聞くことができた」が多数であった結果は、サロンは、参加者のみならず、スタッフにとっても効用があり、彼らの地域学習の機会となっていたことが確認できた。

サロンの事業目的、そして既述の回想法の目的に関連した項目を見ると、「参加者が楽しい時間を過ごしていた」「サロンが参加者にとって、新たな楽しい思い出となったようだ」（目的①の関連項目）、「顔なじみの知り合いが増えた」「参加者のコミュニケーションが徐々に活発になった」（目的②の関連項目）等がそれぞれ80%以上と非常に多数であり、スタッフの意向からも事業目的の達成を確認できた。

さらに福祉パトロールの事業目的に関連した「自治会内であいさつすることが増えた」「パトロールの目が以前より行き届くようになった」も80.0%と非常に多数であり、サロンの波及効果が確認できた（表7）。

次に、サロンの企画で苦労していることとして、「サロンの内容づくり」、そして「その他」として、「今後の経費、予算の組み方等」を指摘する回答が各1（20.0%）であった（表8）。前者は、サロンの企画担当者ではなかったスタッフの回答であったことから、本サロンとは違う現場での苦労点を述べた誤回答と解釈できる。ゆえに、「サロンの内容づくり」は今回の企画担当者からは苦労点として認識されなかったこと、既述のサロン企画上の配慮点の1つ、「企画の時間的、金銭的負担を少な

表4 年をとるということは若い時と比べて

調査区分 回答区分	サロン参加者		上川北部高齢者	
	回答数	比率（%）	回答数	比率（%）
よい*	9	60.0	9	24.3
同じ	6	40.0	9	24.3
悪い**	0	0.0	18	48.6
無回答	0	0.0	1	2.7
計	15	100.0	37	100.0

注1) χ^2 検定により回答区分の分布は調査区分で異なる ($p<0.01$)

注2) 残差分析により調査区分で差がある (**: $p<0.01$, *: $p<0.05$)

表5 生活への満足

調査区分 回答区分	サロン参加者		上川北部高齢者	
	回答数	比率（%）	回答数	比率（%）
はい	12	80.0	32	86.5
いいえ	3	20.0	2	5.4
無回答	0	0.0	3	8.1
計	15	100.0	37	100.0

表6 去年と同じに元気

調査区分 回答区分	サロン参加者		上川北部高齢者	
	回答数	比率（%）	回答数	比率（%）
はい	8	53.3	24	64.9
いいえ	7	46.7	12	32.4
無回答	0	0.0	1	2.7
計	15	100.0	37	100.0

表7 サロンに参画してよかったこと（N=5）〔複数回答可〕

	回答数	比率（%）
参加者のコミュニケーションが活発	5	100.0
参加者が心の元気	5	100.0
経験者の話を聞いた	5	100.0
話したことのなかった人と話せた	4	80.0
顔なじみが増えた	4	80.0
自治会内あいさつが増えた	4	80.0
パトロールがより行き届く	4	80.0
参加者が楽しい時間	4	80.0
参加者が新たな楽しい思い出	4	80.0
参加者がおいしいもの食べた	3	60.0

注) 回答総数は42、1回答者当たり選択肢を8.4個回答

表8 サロン企画の苦労点（N=5）〔複数回答可〕

	回答数	比率（%）
サロンの内容づくり	1	20.0
参加者不足	0	0.0
スタッフ不足	0	0.0
場所や必要物品などの手配	0	0.0
その他	1	20.0

注) 回答総数は2、1回答者当たり選択肢を0.4個回答

くする」が達成できたことが確認できた。

しかし本サロンの事業期間は2カ年であり、2017年度以降は社協からの資金助成が終了する。後者の回答はこのことを指摘するものである。

4 まとめと考察

(1) サロンの効果

自治会と筆者という回想法の初学者が企画の中心となり、試行錯誤によって6回のサロンを実施できた。2015年度は、自治会、社協、道博、資料室、知恵の蔵、保健師の6者の共同参画であったが、2016年度は、さらに士別市交通安全推進員、院生、活かす会らがサロンに参画し、スタッフと話題が多様化した(表2、図1・2)。若いスタッフと高齢者との世代間交流も実現できた。

サロンの効果をたずねる、参加者とスタッフへのアンケートでは、参加者が楽しい時間を過ごす(図3-2、表7)、昔の記憶を思い出す(図3-1)、思い出話で交流する(図3-3、表7)、リピート参加意欲を持つ(図3-8)、社会的サポートを実感する(図3-6)といった肯定的評価が多数で、サロンの目的の達成が確認できた。さらに、心の元気を得るといった回想法の目的の達成(表3・7)、そして同自治会福祉パトロールへの波及効果(表3・7)も確認できた。

(2) 今後の課題

1) コ・リーダーの配置

まず指摘できることは、既述の工夫もあり、2カ年で参加者のコミュニケーションの向上がみられたものの、今回のような12～19名の参加者(表2)に対しリーダー1名で回想法のグループワークを機能させるには限界がある。回想法に関心を持ち、サロンから効果を獲得している(図1・2)、まず保健師、そして資料室、知恵の蔵、活かす会、院生といった今回の参画者を、恒常的なスタッフとして誘い、コ・リーダーとして役割発揮してもらうことが課題である。

2) 人材育成の機会創出

「回想法がなぜ広まらないのか」への一つの回答として、人材育成、リーダーのスキル習得の難しさがある。既述のように、リーダーにはグループワーカーとしての高度な役割発揮のほか、「人の人生に深い関心を寄せる」「自分の至らなさを振り返る」「相手とともに新しい体験に踏み出す」等々、繊細な資質が求められる(野村2011b)。これらは医師や看護師、心理カウンセラーといった医療関係者、保健師など福祉関係者の専門領域であり、一介の学芸員には獲得不可能な資質に思える。

このように備えるべき資質が高度であることに加え、北海道では、例えば「回想法リーダー養成講座」(北名古屋市 2013)のような、回想法のスキルが獲得できる講座の開催は非常に稀である。

3) 福祉サイドとの連携

さらには、回想法の先進地・北名古屋市に見られるような、高齢者保健福祉サイド(以下、福祉サイド)と博物館との緊密な連携(NPOシルバー総合研究所 2007; 市橋 2014、2015)、特に、回想法を地域で行う意義について、保健師をはじめとする福祉サイドが強く認識し、主体性を発揮する体制(NPOシルバー総合研究所 2007)の不在が指摘できる。聞き取り調査の経験はあるにせよ、そもそも学芸員に、前項で述べたような回想法実践の高度な資質がないのは当然である。高齢者の医療、保健福祉を本来業務とする専門職、行政職を引き込み、彼らの問題意識と当事者意識を喚起しながら、適切な役割分担をすることが重要である。

(3) 回想法の普及にあたって学芸員が心がけること

今後、回想法を広めるには、前節で述べた課題を館園が所在する自治体内で、分野横断的に共有し、首長、管理職はじめ関係職員が、解決に腰を据えて取り組むことが肝要である。ここでは、本研究の中で得た知見、すなわち筆者のような回想法初学者の学芸員が、大きな負担を伴わず、すぐに実践できる方策に限って記載したい。

1) 手の届く目標を設定する

回想法の対象者や事業目的を、現状の運営スタッフにて実現・検証可能な内容に設定する。例えば本研究においては、対象をほぼ全員を健常な高齢者とし、サロンの事業目的を「閉じこもり」予防を意図した、既述の3点に絞った。

閉じこもりには、うつリスクがあり、認知症を招く原因(NPOシルバー総合研究所 2007)で、この予防には大きな意義がある。具体的な予防法として、外出する、人と交わる、集団に参加する、仲間づくり(NPOシルバー総合研究所 2007)が挙げられ、実施が比較的容易である。サロンは、そもそもこれらの要素を備えているので、あとはスタッフが協力して、プログラムや素材を互いに持ち寄り、サロンの場が参加者にとって、楽しく、社会参加の手応えを得られる内容になるよう工夫すればよいことにした。こうした発想は、「療法ではない回想法」、「地域回想法」(NPOシルバー総合研究所 2007; 北名古屋市 2013)と重なる部分がある。

2) 福祉サイドに人脈をつくる

本研究では、サロンにて保健師によるプログラムに接することができたことが、回想法の企画者やリーダーを務める上で非常に役だった。このため、例えば、公民館等で開催される高齢者対象の健康講座などに参加して、情報を収集することが重要である。そうした講座では、高齢者向けの心身の健康維持プログラムの内容、そして高齢者への接し方を学ぶことができる。さらには、講師やスタッフをつとめる専門職や行政職と情報交換して人脈をつくることもできる。

さらには、館園間で差異はあるものの、近年の北海道では、館園へ的高齢者の団体利用が増えている(青柳2016)ことから、引率者である高齢者関連の施設・組織の担当者から、高齢者の要望などを情報収集して、継続的な関係を形成することも有効だろう。地道ではあるが、こうした人脈づくりから、福祉サイドと連携できる基礎をつくり、回想法の共同実施へと進む道筋が重要である。

3) 回想法の題材となる地域資源の掘り起こし

大都市と比較して専門職などの人材配置が少ない地方都市や町村では、回想法の参画者は多様にならざるを得ない(図1・2)。学芸員は、館園の強みは何かを考え、その部分での役割発揮を心掛けることが重要である。例えば、館園の豊富な実物資料(体験学習用資料含む)、自然・歴史・文化関連の地域資源に対する専門的な知識がこれに該当すると考えられる。回想法で参加者の属性に合った題材を設定するには、学芸員には自分の専門領域を超えた新たな勉強が必要になることもある。そうした場合は、自組織内や近隣の学芸員と相互に協力しあうことも重要だろう。

既述の「写真回想法」素材は、利用の手軽さから今後回想法の普及に大きく役立つと考えられる。こうした他所の素材と地域資源とを上手く活用しながら、高齢者の豊かな回想を促すことが重要である。本研究では実現できなかったが、既存のハンズオン・プログラムを応用して、例えば、視覚や聴覚が不自由な高齢者向けに、ハッカや亜麻、樹木、ニシンなどの香りを利用した回想法も有効であろう。

学芸員は、「多くの地域資源、それも実物に触れられる場所」として館園の展示室や出前講座へと高齢者を誘い、まずは高齢者との接点を増やして、高齢者プログラムへの苦手意識をなくすこと、日ごろから「回想法で使えるのではないか」という問題意識を持って館園の業務にあたり、回想法の題材となる地域資源を探すことが大切である。

謝辞

本研究にあたって、士別市朝日町あさひ自治会、朝日町郷土資料室、知恵の蔵運営委員会、朝日町郷土の資源を活かす会、士別市の皆様、保健師 黒沼美穂さん、士別市交通安全推進員 高橋賢江さん、交通安全教育守ってあげ隊 山本静枝さん、北海道大学大学院文学研究科 卓彦伶さん、北海道博物館 生活文化研究グループ 学芸員 尾曲香織さん、早坂有美さん大変お世話になりました。本研究は、JSPS科研費15K01153の助成を受けたものです。深くお礼申し上げます。

注

- (1) 懐かしい写真や生活用具などを用いて、思い出、記憶を語り合うことにより、脳を活性化して、心身を元気にする心理・社会的アプローチ(市橋 2014)。
- (2) 認知症高齢者の行動変化の背景にある行動・心理症状。例えば、抑うつや不安、徘徊、物盗られ妄想など(野村 2011a)。
- (3) グループを対象にした回想法を指す。
- (4) 回想法で使用する道具、素材が多すぎたり、一度に提示し過ぎたりすると、参加者の興味が分散される、話題の共有が難しくなるなどして、グループ全体の凝集性を妨げてしまう(NPOシルバー総合研究所 2007)。
- (5) 回想法のリーダーには、グループワークにおいて、リーダーシップを発揮する以外に、誘導者、助言者、提供者、観察者といった多様な役割がある(青井 2011)。

引用文献

- 青井夕貴 2011. リーダーとコ・リーダーにはどのような役割がありますか. 野村豊子(編). Q&Aでわかる回想法ハンドブック. pp. 120-121. 中央法規出版.
- 青柳かつら 2010. 地域博物館における他者との連携による地域学習活動の現状と課題: 北海道士別市朝日町郷土資料室の事例. 北海道開拓記念館研究紀要 38: 55-66.
- 青柳かつら 2012. 高度経済成長期前後における北海道林業労働者の生業技術の変遷: 士別市朝日町の事例. 北海道開拓記念館研究紀要 40: 45-68.
- 青柳かつら 2014. 地域再生をめざした博物館を核とする地域資源ナレッジマネジメントに関する研究: 住民参加による地域資源マップ製作. 北海道開拓記念館研究紀要 42: 1-22.
- 青柳かつら 2015a. 住民協働による森林利用技術の映像記録と活用. 北方地域の人と環境の関係史研究報告. pp. 173-176. 北海道開拓記念館.
- 青柳かつら 2015b. 士別市朝日町の農林業の歴史と文化: 聞き取り調査の記録. 北海道開拓記念館.
- 青柳かつら 2016. 高齢者と協働するナレッジ活用型地域資源学習プログラムの開発—2015年北海道と2003年全国の博物館園対象高齢者プログラムアンケート調査結果の比較から—. 北海道博物館研究紀要 1: 87-102.
- 青柳かつら・朝日町郷土資料室・知恵の蔵運営委員会 2015. 士別市朝日町 知恵の蔵 探してみよう! 地域のお宝 活動プログラム集. 北海道開拓記念館.
- 北海道博物館協会(編) 2015. 第54 回北海道博物館協会研究会発表要旨: 高齢社会のなかでミュージアムにできること.

第54 回北海道博物館協会大会資料。
 北海道社会福祉協議会(編) 2009. 過疎地域における高齢者の生活機能と地域再生の可能性に関する研究。
 市橋良則 2014. 分科会3「高齢化する社会と博物館」, 博物館研究 49-3: 22-25. (財)日本博物館協会。
 市橋良則 2015. 「博福連携」の試み—高齢社会に向けてミュージアムにできること。北海道博物館協会, 第54 回北海道博物館協会研究大会発表要旨: 高齢社会のなかでミュージアムにできること, 第54 回北海道博物館協会大会資料, pp. 22-25。
 北名古屋市(編) 2013. 高齢者の居場所づくりと役割づくり, 北名古屋市。
 NPOシルバー総合研究所(編) 2007. 地域回想法ハンドブック, 河出書房。
 佐藤 誠・山崎 光博・篠原 徹 2005. グリーンライフ入門: 都市農村交流の理論と実際, 農山漁村文化協会。
 須藤 功 2006a. 昭和の暮らし 写真ものがたり: 6子どもたち, 農山漁村文化協会。
 須藤 功 2006b. 昭和の暮らし 写真ものがたり: 7人生儀礼, 農山漁村文化協会。
 須藤 功 2006c. 昭和の暮らし 写真ものがたり: 8年中行事, 農山漁村文化協会。
 鈴木正典 2013 認知症予防のための回想法: 看護・介護に活かすアプローチ, 日本看護協会出版会。
 鈴木正典 2014a. 昭和の暮らしで写真回想法: 1子どもと遊び,

農山漁村文化協会。
 鈴木正典 2014b. 昭和の暮らしで写真回想法: 2家事と娯楽, 農山漁村文化協会。
 宮良高弘・萩中美枝・小田嶋政子 1998. 北海道の家族と人の一生, 北海道。
 野村豊子 1998. 回想法とライフレビュー: その理論と技法, 中央法規出版。
 野村豊子 2011a. 回想法はどのような人を対象に何をするものですか, 野村豊子(編), Q&Aでわかる回想法ハンドブック, pp. 2-3, 中央法規出版。
 野村豊子 2011b. 回想法を実施する者の「資質」としてどのようなことが考えられますか, 野村豊子(編), Q&Aでわかる回想法ハンドブック, pp. 22-23, 中央法規出版。
 野村豊子 2011c. 健常な高齢者を対象とした回想法にはどのような効果が考えられますか, 野村豊子(編), Q&Aでわかる回想法ハンドブック, pp. 180-181, 中央法規出版。
 野村豊子(編) 2011d. Q&Aでわかる回想法ハンドブック, 中央法規出版。
 奥村由美子 2011. 認知症を有する高齢者にとって回想法にはどのような効果がありますか, Q&Aでわかる回想法ハンドブック, pp. 178-179, 中央法規出版。
 矢島 睿(編) 1986. 聞き書き 北海道の食事, 農山漁村文化協会。
 吉本哲郎 2008. 地元学をはじめよう, 岩波書店。



1



2



3



4

写真1 回想法の教科書として使用できた文献

写真3 回想法「子供の頃の思い出」(第1回)

写真2 郷土資料室見学(第1回)

写真4 蕨粉団子づくり(第2回)



写真5 澱粉団子を試食しながらの
回想法（第2回）

写真6 頭と体の体操（第3回）

写真7 回想法「冬の食文化とくら
し」（第3回）（撮影：士別市）



8



9



10

写真8 郷土資料室見学（第4回）

写真9 回想法「子供の頃の遊び」（第4回）

写真10 回想法「子供の頃の遊び」（第4回）



11



12



13

写真11 交通安全のお話（第5回）

写真12 昔のゲームを楽しむ（第5回）

写真13 回想法「昔の結婚式、娯楽」（第5回）



写真14 回想法「昔の医療、薬、病気の思い出」(第6回)

写真15 朝日町旧佐藤医院内見学(第6回)

写真16 回想法の素材として役だった文献

NOTES AND SUGGESTIONS

The Development of a Regional Resource Learning Program Based on the Utilization of Knowledge in Cooperation with Senior Citizens (II): Effects and Issues of a Reminiscence Salon for Elderly Persons Living Alone

Katsura AOYAGI

The purpose of this research is to establish a reminiscence salon and shed light on its effects and issues from the standpoint of developing a program that benefits senior citizen welfare and the utilization of regional resources. The author participated in the reminiscence salon (for 22 elderly persons living alone) organized by the Asashi Neighborhood Association of Asashi-cho, Shibetsu City, from fiscal 2015 to fiscal 2016, as a leader, observing the operational process of the reminiscence salon that was held on six occasions. A questionnaire was given out to participants and staff members at the final meeting to gauge the effectiveness of the salon.

As a result, over two years, six actors that included the neighborhood association, Hokkaido Museum, Asashi Regional Museum, Asashi Regional

Museum volunteers, public health nurses, and the social welfare council, as well as traffic safety promoters, a graduate student, and members of the historical building preservation society, worked with staff, resulting in diverse topics. The questionnaire verified a spillover effect in two aspects. First, the goal was achieved for participants to enjoy their time, exchange stories about their past memories, develop a desire to participate again, and feel keenly aware of the support received from society, and second, that welfare patrols of the neighborhood association were able to reach even deeper into the community than before. Future issues will be developing co-leaders and identifying regional resources to use as material for reminiscence.